

GUEST'S COLUMN

来賓のご挨拶

琵琶湖ヨット倶楽部創立90周年記念 祝辞
滋賀県知事

嘉田 由紀子



琵琶湖ヨット倶楽部創立90周年を心からお祝い申し上げますとともに、今日までの歴史と伝統を築いてこられた関係の皆様への熱意に対し、深く敬意を表します。

セーリングは、オリンピックや国民体育大会の競技種目の一つであるとともに、年齢や性別に左右されず多くの方が楽しめる生涯スポーツでもあります。

多くの皆さんが琵琶湖に集い、湖を吹き抜ける風を白い帆いっぱいに受けながら湖面を進む姿は、湖国滋賀の代表的な風景となっています。

また、自然を相手にするセーリングは、時には風を待つ忍耐力、時には逆風に向かう勇気が求められ、人間形成において大きなプラスになるスポーツだと伺っております。

今後とも滋賀の自然、琵琶湖の素晴らしさや、環境保全の大切さを知り、また、社会を生き抜く力を育むなど

人を成長させることができるセーリングの普及に努めていただくとともに、湖国滋賀を代表する湖上スポーツの一つとしてその魅力を幅広い方に伝えていただければ幸いです。

この創立90周年を機に、「琵琶湖ヨット倶楽部」がさらなる発展を遂げられますとともに、皆様がいつまでも健康で、一層ご活躍されますことをお祈り申し上げ、お祝いのことばといたします。



「琵琶湖ヨット倶楽部90年の歩み」

大津市長

越 直美



琵琶湖ヨット倶楽部が設立され、創立90周年を迎えられましたことに対しまして、心からお祝い申し上げます。

さて、貴倶楽部は、1922年に設立されて以来今日まで、日本ヨット界の黎明期を先導し、競技だけでなくセーリングを生活のサイクルとして楽しむヨットクラブライフを作り上げてこられました。その志は、大正、昭和、平成と数多くの先輩諸氏から皆様方へと受け継がれており、幾多の困難な条件の中、社会人クラブの伝統を守り続けておられる皆様方のご努力に対し、あらためて敬意を表する次第でございます。

また、近年では、「SAILおおつ」、「BYC-CUP」、「比叡レガッタ」を開催されるなど、多くの市民がヨットに親しむことのできる機会を提供してこられました。多くの方々にヨットの楽しさを体験していただき、日本一の琵琶湖でヨットを走らせることは、水の恵み、自然の大切さを実感していただける絶好の機会であると考えており

ます。

本市では、生涯スポーツの盛んなまちづくりを目指しており、今後も貴倶楽部を始めとする様々な関係団体のお力添えをいただきながら、競技スポーツ・生涯スポーツの普及、振興は基より、市民だれもが、いつまでも健康で、元気に過ごせるまちづくりを推進して参りたいと存じます。

貴倶楽部におかれましても、今後益々のヨット競技の普及振興にご尽力をたまわりますようよろしくお願い申し上げます。

結びになりましたが、貴倶楽部が創立90周年を契機に、更なる飛躍を遂げられますことを祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



琵琶湖ヨット倶楽部創立90周年を祝して
滋賀県セーリング連盟 会長

江口 恒信



琵琶湖ヨット倶楽部創立90周年、まことにおめでとうございます。

日本ヨット界の創成期より今日に至るまで、長くすばらしい活動に対し、敬意を表しますとともに、90周年を迎えられたこと、心よりお慶び申し上げます。

琵琶湖ヨット倶楽部は、その創成期において、日本ヨット界のリーダーとして、ヨットの造艇、競技の開催、海外情報の収集・広報、西日本ヨット協会の設立（ひいては日本ヨット協会の設立。）神戸の外人ヨットクラブとの交流等、様々な活動をされております。そのほかにも、琵琶湖における大学ヨット部の設立に深く関与され、同志社大学、京都大学のヨット部が誕生しております。

また琵琶湖ジュニアヨットクラブの創立の中心メンバーとして、ジュニアの育成に注力され、今日の礎を築いておられます。

最近では、琵琶湖カインドレガッタの開催、その発展したかたちでのセール大津の開催は、ひろくレースに馴染みが少ない方も巻き込んで盛大に実施され、ヨットレースの普及に大きく貢献されているものと思います。また、BYCポイントレースを年間通じて開催され、シングルハンダー艇の興隆にも寄与されております。

これらの活動は、日本におけるヨット界の発展に大きく貢献され、琵琶湖ヨット倶楽部でなければ、できなかったものと思われま。また、海外のヨットクラブ

とも交流をなされ、オーストリアでレースに参加されるなど、その幅広い活動は、欧米のヨットクラブに引けをとらないすばらしいものと感じ入っております。

このような立派な活動を長年積み重ねてこられ、本年90周年を迎えられますことは、非常に稀有なことで、先輩諸氏のご苦勞に深く感謝申し上げますとともに、現在の会員諸氏のご努力に心より敬意を表するものであります。今後とも日本におけるヨットクラブのパイオニアとして活躍され、末永く発展されますことを祈念して、お祝いの言葉といたします。



創立 90 周年おめでとうございます

京都府セーリング連盟 顧問

中山 明



琵琶湖ヨット倶楽部創立 90 周年おめでとうございます。

平成 14 年の 80 周年祝賀会当日は高知国体の表彰式前日でありましたが、私は祝賀会に参加させて頂きました。会場には日本セーリング連盟会長の秋田博正様も臨席しておられ、驚きと共に琵琶湖ヨットクラブが日本ヨット界の重鎮である事を再認知する場でもありました。幸い京都府は天皇杯 5 位、皇后杯優勝と言う成績で安堵し、心軽やかに祝賀会を楽しませて頂いた事を彷彿と思い出しました。

祝賀会場での帆友各位との交流と翌年開催された同志社大学ヨット部 70 周年祝賀会でのご交誼が、平成 18 年度開催の京都府セーリング連盟創立 60 周年開催記念誌の原稿ご依頼と祝賀会へのご出席に繋がり、日頃からの帆友とのご交誼の大切さを実感しました。

日本ヨット界草創期をリードした歴史を JSAF も尊重

平成 10 年に日本セーリング連盟構成団体とは別に単独で RRS を使用してレース運営が出来る「登録認定団体」と認定され、さらに平成 14 年度から JSAF 特別加盟団体にクラブと云う分野を設けるのを機に、京都ヨットクラブと共に JSAF 直結の構成団体として認定され、平成 16 年度からは評議員選出クラブとして日本ヨット界に確たる位置が築かれました。京都発祥で日本ヨット界草創期をリードした歴史が尊重され、京都府連加盟でもあったという事で京都府所在として登録されましたが、当時 JSAF の組織関係理事関係業務として提案に携わっていた私は、大変誇りに感じたことを覚えています。

世界が認定した日本最古のヨットクラブ

2010 年にオーストリア、ウォルフガング湖で開催された国際オーストリア、クラシック、セールウィークに招待され参加されたキッカケは EZ 級艇の歴史的な繋がりであり、正に日本を代表するクラブである事が証明されたのも嬉しい限りです。先人の偉功を大切にされている証である EZ 級艇は伝統のシンボルであり、改めて何を守るべきか、物の価値や伝統の力とは何かを私達に教えてくれたのであり、メンバーのご努力に敬意を表しています。

セール大津はクラブ活動を越えたヨット普及活動

平成 10 年から開催されているセールおおつは、年々盛況裡に開催されており京都府連関係者も参加しています。日本の一般的なクラブは、クラブ員の為だけに活動されるのが通例であります、その枠を超えたオープン参加のセール大津の開催は意義深く貴重であります。本来、府県連が行わなければならないヨット普及活動を補間していただいている上に、京都ヨットクラブと京都府連が共同開催しているダブチックレガッタにも湖翔ヨットクラブと共に、家族やセーリング仲間とご参加いただき琵琶湖水域の盛り上げにご協力賜っていますことに改めて感謝申し上げます。

ヨット文化を護りぬく尊い姿勢と活動

2009 年度の柳ヶ崎ハーバー存廃問題の際には、びわこヨットスポーツの衰退危機であり「ヨット文化を護りぬく」という強い決意で協議会を代表して長谷川会長が精力的に行動され、青木副会長の行動力で湖上パレードの成果を得ました。BYC がエンジンとなり一先ず安定化しましたがこの件で水域のリーダークラブとしての面目躍如たる姿を認識しました。

ハーバー連絡協議会に関する諸問題について、4 ヶ月間連日頻りに情報交換させて頂き、協調させていただいた事も歴史の 1 ページとして懐かしく思い出しています。

この 10 年間もクラブ内部指向でなく後世に残る立派な活動足跡を刻まれ、セーリング競技発展の為に活動されましたことに深甚から敬意を致しております。

毎年の懇親会や諸行事でご交誼頂きました事を感謝いたし、今後も協調共同して水域の発展を目指し、貴クラブの輝く 100 年を楽しみにしながら祝辞とさせていただきます。

創立90周年をお祝いして

京都府セーリング連盟 会長

名倉 孝



琵琶湖ヨット倶楽部の皆さま、創立90周年をお迎えになり誠にありがとうございます。地元のヨット関係者といたしまして、心よりお祝いを申し上げます。

貴部の長く輝かしい90年間を鑑みますれば、琵琶湖におけるヨットの歴史と重なり、いや琵琶湖におけるヨットの歴史そのものでありましょう。大正11年(1922年)有志によって日本人による最初のヨット倶楽部として誕生し、昭和の初めにはヨットレースを楽しむクラブとして確立されたとお聞きしております。その後も発展を遂げられ関西主要大学のヨット部の育成に努められる一方、A級ディンギーの導入や国際ヨット競技規則の翻訳に携わられ、関東地区と歩調を合わせて日本におけるヨット競技の基盤づくりをなされました。

当連盟におきましても2代目会長として中塚善助氏にご就任いただきご指導を受けて、国民体育大会において立派な成績をとる事が叶いその後の活躍に繋がっております。組織の成り立ちは違えども琵琶湖におけるヨットの普及と発展に同じ愛好者仲間として手を携えてまいりたいと思っております。

創立90周年を契機として、次の世代にもヨット倶楽部の楽しさを継承され輝かしい歴史を刻み、ますます発展される事を祈念しております。



「ヨット文化」守り抜いて
琵琶湖ヨット倶楽部九十周年を祝して
京都新聞滋賀本社代表

上野 孝司



2011年 SAIL おおつにて

近江は「絹、麻、綿」の生産地がそろう唯一の国だ。湖北の絹、湖東の麻、湖西の綿。この優れた繊維を生み出したのは、ひとえに近江の水だった。川の流れは清く、その流域に豊かな土壌が広がったことは、エジプトなど古代文明史をたどればわかる。

近江の川は「母なる湖」に通じ、多くの生物を育み、古（いにしえ）よりさまざまなものを創造した。そして、近代に入り湖上スポーツのひとつとしてヨット競技をもたらした。わが国で初めてヨット競技が行われたのは琵琶湖だ。今日では競技とともに、湖上文化の域に達し、ヨットのある湖の風景は夏の代表的な風物詩となった。このヨット文化を九十年間にわたり醸成、発展させてきたのが、琵琶湖ヨット倶楽部であり、その貢献は大きい。

昨夏、京都新聞滋賀本社主催のレース「セール大津」で、初めてヨットに乗り込み湖上に出た。二人乗りのヨットで前に座る「クルー」の真似事をさせてもらったが、いざレースとなると長さが一メートル近くあろうか、相当重い「ボード」を上げ下げしたり、セールを右へ左へと動かしたり、なかなか体力を使う。夏の強い日差しも肌を突き刺し、レースの過酷さを味わった。

それにしても、ヨットとは風をうまくコントロールすれば、予想以上にスピードが出るものだ。まさに「湖上を走る」という表現通りだった。風を順調に受け、ヨットの穂先が水を切りながら走れば、感動を感じる。まるで自分が「勇者」になったような思いすらわき上がった。

レースとレースの合間、配食ボートから次々と投げ込まれる弁当をヨット上で食する時間もさすがに短かった。帆を休め、比良山系の緑と真っ青な空を愛でながら、のんびり湖上に漂う。「琵琶湖周航の歌」の「波のまにまに漂え

ば…。行方定めぬ波枕」という歌詞が、決して嘘ではないことを知った。ヨットとは、人工的な音を出さず、自然の音とともに楽しむスポーツ。水と風に溶け込んだ環境に優しいスポーツは、それほど多くはない。

世間では「ヨットをしている」と言うと「お金持ち」という返答が多いと聞く。が、手軽な値段の艇を購入すれば、管理維持費を除けば、それほど金を費やすわけでもないだろう。地元ではヨット部のある高校、大学も多く、近年は若い女性や子供たちもレースに挑んでいる。ヨット競技のルーツは英国皇太子を心身ともに鍛えるため始まったらしいが、自立心、自然との闘い方など多くを学ぶことが出来る。ひとり乗りヨットなら孤独との戦いも学ぼう。教育的効果が高いスポーツであり、青少年のヨット人口をもっと増やしたい。

より多くの人々がヨット体験できる機会を作っていくことが、琵琶湖ヨット倶楽部の百周年に向けての取り組みとなろう。その魅力を広く発信し、決して琵琶湖の「ヨット文化」が切り捨てられないよう、丈夫で大きな帆を広げ前進してほしい。



2011年 SAIL おおつにて

創立90周年を祝って

同志社大学体育会ヨット部鯨会 (OB会) 会長

久保 恵昭



角帽でセーリング

琵琶湖ヨット倶楽部の創立90周年誠にありがとうございます。その長く輝かしい歴史に対し心からお慶び申し上げます。

歴史を顧みて敬服いたしておりますが、創立以来、幾多の困難を乗り越えられ日本のヨット界の進展に大きく貢献され大きく発展をとげられました。そして記念すべき90周年を迎えられた事は誠に意義深く歴代の会長様をはじめ会員の皆様の熱意とご尽力の賜物と深く敬意を表したいと思えます。

我が国のヨット活動は大正末期から昭和初期にかけて関東で葉山、関西で琵琶湖、九州で博多を基地として各々相前後して胎動をみました。

琵琶湖ヨット倶楽部は大正11年(1922年)京都第一商業漕艇部OB有志で結成されたグループで発足、日本ヨット倶楽部を設立し、昭和7年日本ヨット協会設立に伴い琵琶湖ヨット倶楽部に改称されました。

同志社大学のヨット部は来年創部80周年を迎えようとしております。我がヨット部は九帝大、慶応大と共に大学の中で最も古く学生ヨット界では草分け的存在で、学生の運動部として正式に活動をはじめたのは昭和8年(1933年)で琵琶湖ヨット倶楽部内に創立し琵琶湖ヨット倶楽部の先輩諸氏の指導を受けて活動したと伝えられております。

そして琵琶湖ヨット倶楽部から寄贈された赤い帆を装備したA級ディンギーの春風、春波、春光が最初に保有した3杯のヨットでした。

同志社大学ヨット部誕生当時は琵琶湖ヨット倶楽部の中に学生が寄宿しており、同好会としての活動でしたが昭和9年には第2回全日本学生選手権に優勝しております。

昭和11年にはベルリンで開かれたオリンピックのヨット競技に日本が初めて参加、我が同志社大学ヨット部の創設者である吉本善多先輩が琵琶湖ヨット倶楽部から栄誉ある出場を果たされました。その後も数多くの優秀な諸先輩を輩出し、現在の素晴らしい伝統と栄光に輝く同志社大学ヨット部を築きました。琵琶湖ヨット倶楽部での創部もない時期に示された諸先輩の心意気と努力に心から感謝いたします。

この様な歴史から琵琶湖ヨット倶楽部なしでは同志社大学ヨット部は語れないと言う事でございます。

近年のヨットはジュニアからシニアまで、ディンギーから大型艇まで生涯スポーツとして普及しておりますが、大学ヨット部のOBとしては、大学生セーラーが卒業後も途切れることなくセーリングを続けられる環境、インカレが終わった後ディンギーでもクルーザーでの活動でもいいのでとにかくヨット活動の継続が出来る環境づくりの必要性を感じます。

琵琶湖ヨット倶楽部の皆様にはその様な事も含めて多くの方々にヨットライフを楽しむ為の役割を果たす活動を広げ、益々セーリングスポーツの発展へも貢献していただきたいと思えます。

琵琶湖は何ととっても天下景勝の地で有り何ひとつと



「鷗盟舎」艇庫前でA級の補修作業

してセーリングスポーツの条件として他に遜色はありません。この美しく恵まれた環境のもとで90周年の輝かしい歴史を保持された琵琶湖ヨット倶楽部が更に100年という大きな節目に向けて益々躍進されん事を期待し、会員の皆様が今後共情熱を持って日々精進されます事を祈念してお祝いの言葉といたします。

大学ヨット部の悩みと課題

京都大学体育会ヨット部

ダークブルーヨットクラブ (OB会) 会長

元山 近思



琵琶湖ヨット倶楽部が創立90周年を迎えられるにあたりまして心からお祝いを申し上げます。

さて京都大学ヨット部もお蔭様で創部77年を迎えようとしておりますが琵琶湖ヨット倶楽部をはじめ琵琶湖に集う多くのヨットマンの皆様方から賜りましたこれまでのご指導、ご支援、ご協力にこの場をお借りしまして感謝申し上げます。京都大学のみならず同志社大学等の諸大学のヨット部が琵琶湖を根拠地として互いに競り合いながら長年体育活動に励んでわが国大学のレベル向上に貢献してきたことは誇るべきことと思います。また大自然の中でのヨットレースを通して多くの若者が多感な青年期を汗と涙を交えながらもそれぞれが人格形成して社会に巣立っていったことも大いに価値あることだと考えます。従いまして各大学の現役の皆さんには今後ともこの伝統を是非とも受け継ぎ発展させていっていただきたいと切望する次第です。

私自身は昭和39年から43年までの大学4年間をヨット部に所属して授業をかなりさぼってでも琵琶湖の上でヨットに打ち込みました。学業は大学院にいつてからやればよいという覚悟でした。

4年の夏には江ノ島でのインカレに出場できて同僚達の活躍もあって幸いなことにA級ディンギー、S級スナイプの総合3位の成績を得ました。ほぼ半世紀ほど前の経験ですが今でもその時の感動を憶えております。当時、世の中は高度経済成長期でして大学院失業後何の苦勞も無く就職できた時代でした。今から考えると学生時代にヨットに打ち込むには絶好の時代でした。

2年前に京都に舞い戻ってきてOB会長を拝命し、現役の学生諸君と接触する機会が増えましたが学生ヨットを取り巻く環境が大きく変わってしまったことを痛感しまた将来に一抹の不安を憶えるようになりました。それは部員数の減少です。

最近、京都大学ヨット部では部員の確保が非常に難しくなっておるようです。結果としてレースに2クラスともエントリーすることが出来ない状況があるようですが、レースに勝てないこともさりながら部の存続そのものを私自身は危惧しております。京都大学体育会に所属する他の部では必ずしも部員数減少の問題が共通してあるわけではありませんので学生のスポーツ離れの傾向があるとは一概には言えなくてヨット部固有の問題なのかも知れません。

原因は色々あるのですが、部活動費用としての個人負担が大きくなってきたことと授業出席を求める大学の厳しい姿勢が影響してるように思います。また大学の構内を歩いてますとリクルートスーツを着た学生を見かけますので大学を出れば就職できた時代とは状況がすっかり変わってしまったことを痛感しました。従って平日に琵琶湖で合宿なんかしてれる時代では無くなったということのようです。

ヨット部の活動は、ボートのように朝、夕漕いで日中は大学に通うというパターンにはならないわけでした練習をやるなら一日琵琶湖にいるとならざるを得ないので練習は週末だけになってしまうというのが現状のようです。これでは強くなれないので平日にでも合宿をやらうとすると部員が離れていってしまうという悪循環に陥ってしまいます。

体育会ヨット部と称する限りはレースに勝つことを目標として活動して貰いたいと多くのOBは願ってますしその意味において資金的な支援もやってやろうという気持ちになるのが人情ですが現実には部の存続のためには何をすべきかということが現役、OB会の当面の大きな課題です。

私自身は琵琶湖という大自然の中でのヨット部活動が将来を背負って社会に羽ばたいていく人材の人格形成に大いに役立つと信じてますので琵琶湖を根拠地とする京都大学ヨット部の火を消すことが無いように今後ともOB会として現役の諸君と一緒に考え支援していく所存です。

最後になりますが琵琶湖ヨット倶楽部の益々のご活躍を祈念しております。

そして現役の皆さんには是非この伝統を受長く継いでいっていただきたいと願っております。

生みの親『琵琶湖ヨット倶楽部』に感謝

琵琶湖ジュニアヨットクラブ 会長

仲野 薫



琵琶湖ヨット倶楽部創立90周年おめでとうございます。

日本でも最初のヨット活動を開催され、学校をはじめ実業団のヨット部の育成をされるなかで、琵琶湖ヨット倶楽部のメンバーの子弟の方が小学校の高学年になられたのをきっかけにクラブハウスの使用等、合宿やレースの運営等々人的物的なご指導とご援助のもと琵琶湖ジュニアヨットクラブが設立されました。

琵琶湖ヨット倶楽部の諸先輩の学校や企業等々の人脈が受け継がれましたお蔭で、多くの優秀な選手を輩出する全国でも有数のクラブに成長する事ができましたのは、生みの親の『琵琶湖ヨット倶楽部』があつてのことといつても過言ではございません。

自然相手の競技だけに、いつも良い季節ではなく厳寒の琵琶湖での練習は子供達にとっては辛い練習であり、頑張ることにより強くなる自分を信じて頑張る子供たちの姿に指導者（父兄）は、頑張つて強い選手に育てていこうと寒さと戦いながら練習に取り組む厳しい時期でもあります。

今までの無事に感謝するとともに、柳ヶ崎のハーバーにて活動される皆様のお蔭と感謝申し上げます。また、子供同士の年齢差を越えて、ヨットの活動ができる琵琶

湖ジュニアクラブは、縦社会の高学年が低学年の面倒を見るという本当に素晴らしいクラブで、卒業生の多くのものが、ジュニアに入っていてよかったと思えるクラブに成長していくことができましたのは、OB諸氏の並々ならぬ情熱と努力の積み重ねの賜と思います。

今後、琵琶湖ジュニアヨットクラブは、みんなが楽しく活動し、自然相手に感性・感覚を磨き、次期ヨット界を担う選手の育成を目指したクラブになると共に卒業生の皆が琵琶湖ジュニアで活動できたことを誇りに思えるクラブであり続けたいと思います。

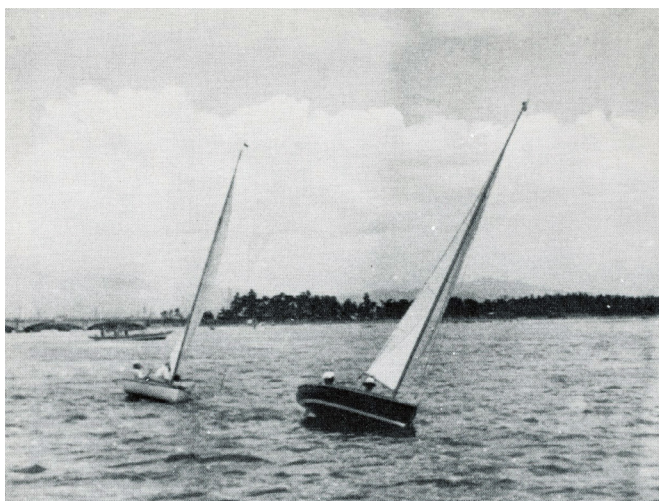
最後になりましたが、琵琶湖ジュニアを設立していただきましたことを感謝しますと共に、歴史ある琵琶湖ヨット倶楽部の今後益々のご盛況を祈念しお祝いの言葉とさせていただきます。



2011 SAIL おおつ

祝琵琶湖ヨット倶楽部創立九十周年
九州大学帆友会 会長

川建 和雄



昭和十年 日本最初のヨレ級二隻 (堺菊治提供)

琵琶湖ヨット倶楽部創立九十周年おめでとうございます。

大正十二年貴倶楽部創立。次いで昭和二年九州帝国大学ヨット部が呱呱の声を上げました。九州大学ヨット部五十年史には、琵琶湖ヨット倶楽部会長長谷川英一、琵琶湖と玄海…半世紀の昔を偲び九大ヨット部とBYCを思う…、並びに鈴木英、ヨット古事記、と玉稿二編を賜りました。其上、昭和八年琵琶湖を帆走するA級ディンギあかつき、操るのはベルリン五輪出場吉本善多氏、及び昭和十一年建造 Einheits Zehner、並びに昭和八年東京品川第一回全日本選手権の役員選手記念写真と、日本ヨット界黎明期の貴重な写真三葉を御提供下さいました。猶、貴倶楽部八十周年記録に、Einheits Zehner は平成四年再進水した、と拝見致しました。由緒ある名艇保存への情熱と、それを実行なされた努力と力量に深く敬意を表します。

貴倶楽部との交流を通じ、弊部も亦、黎明期の日本ヨット界発展に力を注いで来た事は、私共後輩の大いに誇りとする処であります。

貴倶楽部は昭和七年英国RYAから国際単一型十二呎艇所謂A級ディンギの設計図モールドを取寄せ、昭和八年四月大津市桑野造船所にて十隻を建造なさいました。そして其の内二隻を、九州帝国大学ヨット部の求めに応じ、快く御譲り下さいました。

昭和十一年ベルリン五輪ヨットレースへはスター級に九大ヨット部OB三井卓雄が出演致しました。貴倶楽部鈴木英先輩は、戦前から戦後も引続き、石神脩、堺菊治、三井卓雄、森田愛之の弊部神代時代の先輩と、連絡取合う仲であったと伺いました。マーク回航で水を要求するに際し、九大チームはBitte Raumと礼儀正しく声を出して居たと懐かしみ、更にフェアプレイと敢闘精神を称えて下さった上、九大端艇部に対する気持ちの中には何一つ不愉快だったり、腹が立ったりしたという記憶はない。

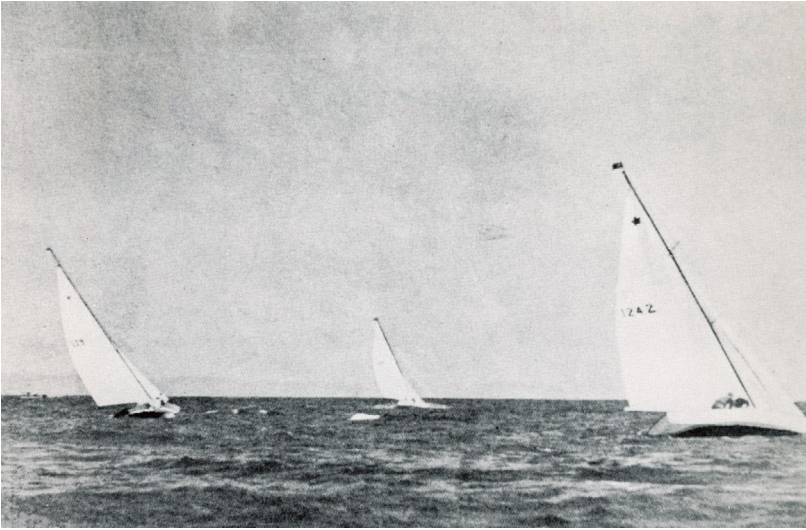
常に良き友であり、互いに励まし合ったライバルであった。と、結んである其の玉稿は、厚意溢れる賛辞で埋められて居ります。私共、後輩にとり、真事に嬉しく有難い言葉であります。

時は少し戻り昭和八年、琵琶湖において、貴倶楽部と弊部の間で、日本人による最初のヨットレースが、八隻のA級ディンギを使用して実施されました。結果は、貴琵琶湖ヨット倶楽部の圧倒的勝利でありました。レース後の懇親会 trinken und essenの席上、貴倶楽部の何方かが、勝利の秘密を御教示下さいました。Manfred Curry, Regatta Taktikを研究して居た、と。九大チームは此本をドイツから取寄せ、部長神中正一医学部教授を中心にヨットレースのゼミナールが設けられ猛烈な勉強が始まりました。甲斐将明訳、鬼木棟隆訳があり、整形外科教室16mm撮影機を用い、カリーの作戦、実演フィルムを作成、部員を指導したと伝えられて居ります。昭和十三年、マンフレッド・カリー著向笠廣次訳ヨット競技戦術集(1)及び(2)の船社への投稿が始まりました。

以上勝手な抜書きで失礼致しました。

琵琶湖ヨット倶楽部創立九十周年真事におめでとうございます。是を機に、琵琶湖ヨット倶楽部が益々御発展なさいますよう御祈り申し上げます。併せて、今後も引き続き御厚誼賜りますよう御願ひ申し上げます。

平成二十四年六月三十日 記



昭和十一年四月 横浜小港海岸 ベルリン五輪スター級予選
 右から 1242 玄海 三井・龍野、 1228 バリフー財部兄弟、紺碧（早大）中橋・田原（雑誌舵から転載）



昭和十三年 六米級 玄海（麻生典太所有、小澤吉太郎設計、雑誌舵から転載、）



昭和十五年 紀元二千六百年型国内五米艇
 レストリクト艇を単一規格化したもの（柳ヶ瀬勉提供）



昭和二十七年 六米級 玄海 米軍より返還後の姿

つかの間の60年

名古屋大学ヨット部OB・海事資料室鬼崎文庫

大橋 郁夫



私は昭和5年生まれ。いわゆる勤労働員世代で、戦争直後の中学生時代、接収から放出されたオンボロのA級ディンギーを拾って闇市で資材調達し整備・伊勢湾北部を乗り回した少年海賊団に加担したのが事の始まりでした。首尾よく入った大学ではヨット部に。対校レースの傍ら、当時名古屋の実業団ヨット部に入った大型ディンギーI・Sの押し掛けボースンをやり、この艇を借りて戦後初の伊勢・三河湾周航を完成しました。この辺から後の外洋帆走協会東海支部の芽が出て、かのチタグループも育っていったわけです。

名古屋大YCは戦前から同志社・京大との対校戦で例年柳が崎の鷗盟舎に参っており、私は多分昭和も25年が初見参、海軍士官の装いで現れた方はかの井上正春さんだったと知りましたがこれは余談、スグ隣の煉瓦張りのBYC艇庫・ハウスを挽かせて頂いたのが強烈な印象として残っています。アインハイトツエナーの騰装など、当時名古屋のヨット界を牽引してみえた同志社先輩の前田輝雄さん、と後日の話題にもなったものです。

調べて見ますと、日本の昭和初年はヨットが漸く人の目の届く所に来て主要地でヨットクラブが生まれた時代ですが、BYCは更にその数年先を走って来られた訳です。

昭和7～8年ころには同志社・京大のヨット部がBYCの懐から巣立ったと伺いますが、名古屋大学のクラブも殆ど同じ時期・事情で名古屋港にあった東海ヨット倶楽部から分立したのは面白い歴史の一致です。更に、BYCがその昔、京都第一商業学校のボート部から始まったというお話、東海ヨット倶楽部もやはり名古屋商業学校（通称C・A）同窓会の東海ローイング倶楽部から来ていますから偶然か必然か。当時この両都の実業界・財界の実力者を輩出していたであろう商業系の同窓会の貫禄というものが窺われるようです。

本邦最初の大学対抗ヨットレースと目される昭和8年の同志社・名古屋医大戦は、例のBYC新造のA級ディ

ンギー10隻で柳が崎で行われ、その刺激で翌年は名古屋で東海ヨットクが新造した10隻で、以来連年恒例となっています。

この6月、全日本A級選手権大会で久しぶりに柳が崎ハーバーへ参りました。目を見張るばかりの立派な施設の広いスリッパ一杯に入れ代わり立ち代わり展開する多種多様なディンギー群、可愛い幼少年の活動、さらに壮年から初老の方々による支援の状況なども羨ましく拝見するにつけ、当初から此処のヌシとして発展してきたBYCの実績と指導性に敬服いたします。

A級・スナイプ・ヨーロッパ級など個々の例を挙げるまでもなく、この地は日本におけるディンギーセーリングのメッカです。おおいに誇って頂きます。更にはユングフラウの昔話も伺うとき、さらなるBYCのご盛況と、あわせてご指導を願うものです。

BYC の思いで

京都ヨットクラブ 名誉会長

大谷 紀美子



2011年 ダブチックレガッタにて

創立90周年、おめでとうございます。

90年という年月を考えると、琵琶湖ヨット倶楽部（BYC）さまは、関西でのヨット活動の草分け、日本国内をみても、非常に早い時期から活動されていたことがわかります。日本人にとってヨットがまだ珍しい頃から、大勢のメンバーの方々が、琵琶湖という大きな湖でヨット競技を楽しみ、競い合い、楽しんでこられたことはとても素晴らしいと思います。ヨットが日本に紹介された正確な年月日を知りませんが、大正時代、野尻湖では外国人たちが楽しんでいたようです。母方の曾祖母が夏には暑い東京を離れ野尻湖へ避暑に行きたいが、「あそこには赤鬼さんや青鬼さん（欧米人のこと）たちがヨット遊びをしているから、怖い」と言っていたと、母から聞いた事がありました。

私が、BYCの名前を知ったのは、はるか遠い昔、子供の頃です。京都ヨットクラブ（KYC）のメンバーだった父は、当時、毎週日曜になると、お弁当持参で柳が崎にあったKYCへ通っていました。いつの頃からか、夏休みの日曜日には、父に連れられて私も通うようになりました。やっと少し泳ぎを憶えた私は栈橋近くをさかんに「犬かき」で泳ぎ回りました。KYCのクラブハウスを出て水に入り、ヨットの出入りのないのを見定め、栈橋を右に廻ると、そこがBYCでした。栈橋近くは船の出入りが多く、危険だし邪魔になるから、あまりうろうろしてはいけないと、言われていました。だから、ちらっと横目でBYCの建物を見ては、安全な方向へ泳いで戻った思い出があります。

夕方、皆がヨットを片付け、帰り支度を始める頃、しばしばお隣のBYCのクラブハウスからメンバーが顔を出され、声をかけてられました。メンバー同士がなごやかに挨拶を交わし、雑談し、時にはレースの簡単な打ち合わせなどもされていたのかもしれませんが。二つのクラブは道路側からか、湖面からでなければ往き来は出来ませんでした。その後、両クラブはあちこち移転し、昔の

ようにお隣同士ではなくなりましたが、レースなどのおつき合いが続いているのは素晴らしいと思います。

私は長い間、ヨットとは無縁の日々を過ごしていましたが、数年前にKYCから声がかかり、再びヨットや琵琶湖とのおつき合いが始まりました。BYCのメンバーの方々とお会いする機会も出てきました。今後ともよろしくお願いを申し上げます。

人々の生活に重要な役割を果たしている琵琶湖が、私たちの子孫の代まで末永く、美しい景観を保ち続け、ヨット活動ができることを願っております。



1996年 比叡レガッタにて

祝・創立90周年<楽しいヨットライフを>
日本レーザークラス協会 会長

木村 治愛



琵琶湖ヨット倶楽部が創立90周年を迎えられたことを心からお喜び申し上げます。レーザー仲間の青木英明副会長のお誘いを受け記念祝賀会に参加させていただきました。

その昔、浜大津から湖面を望むといつも沖にヨットの白帆が浮かんでいました。そこに日本最古のヨット倶楽部があるとは当時知る由もなく、ただ他では見ることのない風景に見入ったものです。

倶楽部の年表によって、大正11年創立から戦中戦後を経て今日までの活動をつぶさに拝見しました。極めて個人的な興味ですが、私が生まれた1932年、初のA級ディンギー10隻が大津桑野造船所で建造されたこと、この年に日本ヨット協会が設立され、それに伴って当倶楽部の名称が日本ヨット倶楽部から琵琶湖ヨット倶楽部に改称されたことを発見して感動を覚えました。

私は約60年前に甲南大学でヨットを始めました。中古スナイプ1隻と借り物のA級ディンギー2隻でヨット部が創設されました。関西水域にはすでに大阪、関西学院、関西、大阪市立、近畿、神戸商船、和歌山の7大学のヨット部があり、8番目の大学として参入しました。

大学卒業後はOB有志のグループで横山晃設計20ft JOGを奥村ボートで建造し、瀬戸内海～紀伊水道のクルージングを楽しみました。この艇を選んだのは、御巢鷹山日航機墜落事故で亡くなった大阪大学OBの颯川三郎さんの推薦によるものでした。

年月と共にメンバーの嗜好は変化してグループを解散、私は自分一人の都合で気ままに遊べるディンギーに乗りたいたいと思うようになり、1975年夏レーザーにたどり着きました。

レーザーは、1971年に最初のプロダクション・モデルが発表され、1973年日本に上陸しました。一般にヨットの楽しみは走らせる技術だけでなく、ハル、スパー、セールをはじめとする用具の材質や形状を色々工夫して性能を追求するところにもあます。

レーザーはそれらの工夫の余地を一切排除し、君のセールはどこのだから速いとかマストがどうだからといったことではなく、誰もが”腕前”とほんの少しの”運”を競うレースを楽しめることを狙って開発されました。



ジアイカップにて(芦屋) 2012年8月5日

レーザーを日本へ持ち込んだのは故山村彰氏、1972年ミュンヘンオリンピックヘフライングダッチマンの選手として出場した際、レーザー開発者の一人であるイアン・ブルース氏から日本でレーザーを普及してほしいと頼まれ、即座に引き受けて翌1973年、日本レーザークラス協会とパフォーマンス・セイルクラフト・ジャパン(ビルダー)を立ち上げて日本国内での普及が始まりました。

実は、山村君は甲南大学ヨット部の3年後輩ですが、在学中、スナイプのバウの浮力を増す必要があるから、バウの形をリミットまで広げるとともに外板を薄くして軽量化したボートの建造を大津桑野造船所へお願いしたいから付けて行ってくれと言い出し、桑野造船所へ足を運んだことがありました。そのスナイプは関西水域で負け知らずとなり、その建造技術は一般に普及することになりました。人一倍ヨットの性能向上に熱心だった彼が、完全なワンデザイン・ボートの普及の先頭に立ったことに面白さ感じます。

このような意味で、レーザーの出現は世界のヨット界の革命的な出来事となり、最も多く普及しているヨットという理由で1996年アトランタ五輪から正式種目となりました。

革命的といえば、ISAFはヨットを「観て楽しめるスポーツ、テレビ映りの良いスポーツ」にするために躍起になっています。五輪決勝のメダルレース方式はその一つの表れです。それが出来なかったらIOCはヨットを五輪種目から外しかねない勢いだからです。しかし、セールいっぱい国旗を貼りつけたロンドン五輪のヨットレースは美しくないばかりかナショナリズムを助長するようで感心しません。

琵琶湖ヨット倶楽部では1936年に建造されたEZ級ヨットを修復中とのこと。"SAIL おおつ"は14回を記録し、"BYC Cup"は毎月開催されています。

会員およびご家族の皆さんが歴史に輝く倶楽部を中心にしてお元気で未永くヨットライフを楽しまれることを願いたします。



1994 Laser World Wakayama

Dear sailors of the Biwako Yacht Club,

N 40, "BALMUNG", 1933

President of the 10qm Racing Class Association

Member of the Union Yacht Club Mondsee, est. 1908

Member of the Union Yacht Club Stammverein, est. 1886

Artur Vlasaty



N 40, "BALMUNG", 1933

Dear sailors of the Biwako Yacht Club,

With deep respect and a smile on my face, I send my heartiest greetings to the Biwako Yacht Club, which is celebrating its 90th anniversary.

About 100 years ago sailing as a matter of sport was still young and only existing for the upper class of the society. Only temporarily halted by two world wars, sailing activity continuously increased, and finally after World War II became open for all as a pleasure for whoever wanted to follow its fascination.

Today there are thousands of sailing clubs worldwide where already kids get the chance to learn how to deal with wind and water on a sailboat. Most clubs are more or less young. But there are some that have quite a bit of history and the Biwako Yacht Club is one of those, no doubt.

It is well known that this sailing club is the owner of the historic 10 square meter racing dinghy of the Einheitszehner class, SVARA, built in 1939. This leads me to bring a review of the historic events starting shortly before the birth of the Biwako Yacht Club and dealing with the birth of the Einheitszehner.

On November the 27th, 1921, it was a Sunday; the German Sailors' Association (DSV) had its annual meeting in Berlin in Hotel "Kaiserhof". This meeting was a big moment also for Austria because the Union Yacht Club from Austria became member of the German Sailors' Association and had for the first time a seat and a vote in this meeting, where the following resolution was made: A category of "racing classes" for dinghies was created with subdivision into 5, 10, 15 and 22 square meter racing classes. The already existing 20sqm racing class was excluded, because the strong lobby of the 22sqm sailors were afraid of the competition that was coming up with the 20sqm boats that were and still are

the fastest racers with their light, long and slim hulls. The new-born 10sqm racing class got as a sign the letter "N" in its sail. (5 with "V", 15 with "M", 20 with "Z" and 22 with "J")

Before this day the 10sqm dinghies were listed in the category of the "Gig Class IV". Although their boat types been existing already years before, still, by definition the 10sqm racing class was created in 1921, one year before the birth of the Biwako Yacht Club. By the way, the oldest 10qm dinghy with measurements that is documented was built in 1909.

Until the 1920s the 10sqm was an open construction class with few measurement regulations only, like limited sail area. The engineers and boat builders had a wide field of experimentation, to make those boats faster and faster. This was the reason, the racing class was the most developed dinghy in those days and most sailors preferred this spectacular boat type.

At the early 1930s a new movement of sailors came up with the tendency to create a dinghy with precisely regulated measurements within the class. The idea was to figure out who the better sailor was and not whose boat allowed the best performance. Also the costs for newer and faster constructions became ever more prohibitive. Different constructions were tested in races and finally it was the design of Reinhard Drewitz from Berlin that became the definition for the "Einheitszehner", which had a measurement regulation in all details and was born 1931. The drawings for the Einheitszehner Class were published at the German Sailors' Association and the sign in the sail which had been "N" before, was now three connected rings. Soon the German Thyssen-Krupp Steel Company insisted on a change of this sign, because it was very similar to their logo. Therefore the inner lines of the rings got erased.

At this time about 350 boats of the 10sqm racing class had already



been built, and with the Einheitszehner formula another 100 new boats found its owner. The Einheitszehner was the first dinghy in sailing history that had a strict and limited measurement regulation in the German area. One disadvantage turned out soon. Since no technical improvements were allowed anymore, the engineers and investors lost their interest in this class and moved to other classes.

On the other hand a new Einheitszehner could be built for a reasonable price and became the most popular dinghy in those days. After the Olympic Games in Berlin in 1936 the Einheitszehner was elected to be raced for the next Olympic Games in Japan in 1940.

This must be the reason that Zenta Yoshimoto from the Japanese Olympic Team 1936 and member of the Biwako Yacht Club brought the drawings of the Einheitszehner home to Otsu and ordered the construction of SVARA in 1937. Unfortunately Zenta Yoshimoto was lost to us in World War II, the Olympic Games 1940 in Japan got cancelled, and also in Europe a lot of boats became victims of the war and were destroyed.

But SVARA survived in the Biwako Yacht Club and with her the original drawings of the Einheitszehner. Later it turned out those drawings were the last existing pieces.

Soon after World War II the Einheitszehner was not supported anymore in Germany and got finally erased from the class register in 1952. Only in Austria some sailors tried to give the 10sqm Racing Class a new future. There were already regattas sailed in a field of about 10 boats in 1948 in the open 10sqm Racing Class together with the few existing Einheitszehner.

In the mid 1950's synthetic materials came up in boating and wooden boats went out of fashion. Some boat builders and sailors in Austria tried to produce 10sqm boats built out of plastic, but with the other upcoming international classes like Flying

Dutchman, 470 etc., the final end of the 10sqm Racing Class was confirmed by the end of 1960s.

For almost 50 years there was no activity anymore in this class.

In 2006, Matthias Pechstein from Berlin, Thomas Koerner from Salzburg and I decided to give the 10sqm Racing Class a new lease of life. Wherever we met sailors from old days, we could feel that the spirit and the excitement for this class still exists and is big. Out of our idea we tried to find all boats that survived, to motivate their owners and to activate the old tradition also for younger generations. In our research activities we found SVARA from the Biwako Yacht Club in 2009. This was a sensation to us. I visited SVARA in Otsu in winter 2010 and found her in an exceptionally good original condition, such as I have never seen before.

In 2010 German, Swiss, Austrian and Japanese sailors sailed together the classic boats at the Austrian Classic Sailing Week on lake "Wolfgangsee" in old tradition. This great historic moment is hard to describe in words, because it was full of wonderful impressions, strong emotions and thrilling adventures.

Today the 10sqm Racing Class is back in life and with her a lot of sailors, who share and enjoy those wonderful masterpieces.

And SVARA showed us that she is more than just a beautiful boat. She is the entrance to wonderful friendships between sailors from different nation.

I wish the Biwako Yacht Club, all his sailors and their families that the spirit, the fascination and the tradition of sailing will always be a good partner in providing them with wonderful adventures und friendships beyond all borders.

Austria, 2012

琵琶湖ヨット倶楽部90周年に寄せて
ヨットクラブがヨット文化継承の礎となる
web-magazine <yachting> 編集長
本橋 一男

1946年東京生まれ。日本大学卒業。月刊「舵」編集長を経て1986年に月刊「yachting」を創刊。以後、12年間にわたってヨット専門誌の編集長兼発行人として国内外のヨット情報発信。その後、ヨット情報発信の新しい試みとしてweb-magazine「yachting」創刊。

参加、取材した海外レースはアメリカスカップ、アドミラルズカップ、シドニーホバートレース、トランスパック、シドニー五輪など多数。



8月の半ば、世界中を沸かせたロンドン五輪が閉幕した。4年前の北京五輪で、期待されながらもメダルを逸した日本のセーリングチームだが、その後4年間、選手、スタッフが丸となって切磋琢磨し、今度こそ、の思いを込めて勇躍ロンドン五輪に挑んだ。

しかし、結果は惨敗だった。この報告を受けて、なぜとの思いを強く感じた。

とくに、世界ランク1位で五輪に臨んだ470級女子の近藤愛・田畑和歌子はメダル獲得の最右翼候補だっただけに、緒戦のリコールやメインハリヤード・トラブル、DSQが直接的な敗因だったとはいえ、万全の態勢で挑んだ世界一の実力の持ち主たちの、2度目の五輪挑戦でのメダル獲得を阻んだものは何だったのだろうか。

欧米の海洋国にヨット遊びが始まって、ヨットクラブが誕生し、上流社会の文化として定着したのは19世紀の始めであったが、現代では、ヨットを中心とするマリンスポーツは一般市民のものとなり市民生活の大切な部

分を占めている。

欧米のヨットिंगの特徴は、ヨットクラブをベースにしていること、遊び方に関して普遍的なルールを持っていることである。

たとえば、米国のサンフランシスコを中心とした200哩圏内にある71のヨットクラブ(*)は、それぞれの地域コミュニティの社交の中心となっている一方、ヨットिंग発展の共通の目的のために、ヨットクラブ、コーストガード、州政府、ヨット・ボート産業間で相互連絡を図りながら、ヨットレースをプロモートするための組織づくりや、ジュニアヨットマンの育成などを図っている。こうしたヨットクラブからは優秀なセーラーが数多く輩出し、多くのメダリストが誕生している。

戦後の混乱期を経て、高度経済成長に成功し、所得と自由時間の増えた昭和70年代前半、日本にもヨットिंग待望論を官民あげて唱えた時期があった。四面環海の日本で、余暇を有効活用するには、欧米の海洋国で生



Photo:Kazushige Nakajima



Photo:Kazushige Nakajima

まれたヨッティングが最も相応しい、という論調だったが、これは、ヨッティングの発展を願う関係者にとっては朗報だった。しかし、欧米海洋国の伝統の中で生まれた、国民文化としてのヨッティングが、彼らとは異なった史観（価値観）を持つ日本国民に理解されて根付くには多くの努力と時間を要し、残念ながら、いままだ、ヨット文化が日本に根付いているとは思えない。

欧米のヨット文化の基盤はヨットクラブにある。ヨットクラブは、まさに半公、半私の社交の場で、王室も市民も、ビジターの日本人も、ヨッティングという共通の価値基準によって親しく付き合うことのできる世界である。産業や技術の導入と異なって、欧米の海洋国民の価値観から生まれたヨット文化の導入は、ハードウェアだけを導入しても根付きはしない。ヨッティング関係者はもちろん、日本の政府も国民も、海洋国民としての自覚をもってヨット文化を理解したとき、始めて日本のヨッティングの未来が開けて来るに違いない。

五輪でメダルを獲得するには技術だけでは勝てない。欧米のセーラーがなぜ強いのか。彼らのなかには、歴史と伝統に培われたヨット文化があり、そのヨット文化に裏打ちされた強靱な精神力がある。

創立90周年を迎えた琵琶湖ヨット倶楽部には、欧米のヨットクラブと同じ史観があるように思う。先覚者として、90年におよぶ歴史と伝統のなかで育まれてきたヨット文化は、何物にも代えがたい日本の貴重な財産である。四面環海の日本に、琵琶湖ヨット倶楽部のような本当の価値観を持ったヨットクラブが数多く生まれれば、日本にも本当のヨット文化が根付くに違いない。

琵琶湖ヨット倶楽部創立90周年、本当におめでとうございます。

(*) Yachting Year Book California 1991

写真撮影・中嶋一成

創立 90 周年を祝して
京都ヨットクラブ 会長
山田 治一



1994年 比叡レガッタ

琵琶湖ヨットクラブ創立 90 周年おめでとうございます。琵琶湖ヨットクラブには一方ならぬお付き合いをさせて頂き有難う御座います。

90年に及ぶ歴史の中、琵琶湖カインドレガッタ、セール大津と、ヨットレースの普及に尽力されている事、心より敬服いたします。

私どもクラブとは40年以上長きにわたって、途中1クラブ増え3クラブ対抗の比叡レガッタで親交を深めさせて頂いています。私の記憶では比叡レガッタに出場し勝った覚えがあります、それを考えますと、その大会が第2回だと思えます。第3回より以後12回までわがクラブは負け続けていました。

当時の琵琶湖ヨットクラブの方達はかなりレース派でのんびりレースをする京都ヨットクラブとはかなりの力の差があったようです。

私ども京都ヨットクラブはダブチックレガッタを毎年6月の第一日曜に開催していますが、出場選手がほとんど比叡レガッタの皆さんで、琵琶湖ヨットクラブの会長もおいでになり楽しく賑やかに一日を過ごしています。

また琵琶湖ヨットクラブが開催されていた琵琶湖カインドレガッタでは、ゲートスタートを採用されパスマフィンダーのEZがスタートラインを引いていくといったユニークなものでまさにレース派のクラブらしいレースでした。

今現在行われているセール大津は毎年多数の艇が参加してレースを楽しんでいます。

又EZを通じドイツやオーストリア等ヨーロッパの名門ヨットクラブとの親交を深めておられることも素晴らしい事です。

これからも、すぐに来る100周年、150、200周年と琵琶湖ヨットクラブのさらなるご発展をお祈りし良き盟友として変わらぬ親交をお願い申し上げて、お祝いの言葉と致します。



1994年 比叡レガッタ

琵琶湖ヨット倶楽部創立 90 周年を祝して
京都ヨットクラブ
中西 隆太郎



琵琶湖ヨット倶楽部創立 90 周年まことにおめでとうございます。

私が、B Y C のメンバー方々と初めてお会いしたのは K Y C に入会した年の昭和 45 年 (1970 年) です。その年は第 2 回目の比叡レガッタが開催されましたが、その時私が感じた B Y C さんの印象は「レース指向の若い人が多い非常に活発な倶楽部！」というものでした。

この事は今回琵琶湖ヨット倶楽部創立 90 周年祝賀会案内を拝見して納得いたしました。つまり京都第一商業学校の漕艇部有志によって大正 11 年に創立されたルーツが体育会系のヨットクラブであった訳です。

これに対し、K Y C はまさにヨットを趣味にしていた中年の人たちが進駐軍のヨット接收に対応し、集まって誕生した同好会であったのです。しかも創立期の先輩方は冬にはスキーに熱中し、さらに夏はヨットだけでなくクラブハウスにもこだわりを持ち、何回かの移転建て替えの末、現在のクラブハウスをつくられた。このクラブハウスはクラブライフを楽しむべくつくられたことが想像できる構造です。

結局 K Y C は、善く言えばオールラウンド指向、悪く言えば欲張りクラブということになるのではないのでしょうか。欲張ればお金がかかるため、ヨットが好きでも入会金や会費が高く若い人は入会できない。そこで K Y C では会員の高齢化が始まった訳です。

K Y C の 50 周年記念誌「友風遊水」にこの事を裏付ける記事が野田治氏によって記されています。その記事のタイトルは「比叡レガッタ、第 1 回比叡レガッタ」として記念誌の 29 頁から 30 頁にわたり書かれております。その記事によりますと「第一回比叡レガッタは、1969 年 8 月 24 日 (日) に、K Y C 沖で、K Y C がホストで開催された。当日は、快晴南西の風 5 ~ 8 M で、当時隆盛を極めたシーホースとその数年前に B Y C の西之園氏が、ヨーロッパから導入され盛んになり始めたヨーロッパモスで、競われた。いわば、シーホースの本家で

あった K Y C とヨーロッパモスの本家であった B Y C の懇親レースとして始まった。(中略) 参加メンバーは K Y C は大谷名誉会長以下当時のメンバーが殆ど参加されました。故人となられた三宅氏、太田黒氏、北岡氏等既に 50 代の方々が活躍されたのが昨日のこのように思えます。B Y C は、故長谷川英会長以下、当時の若手、城、西之園、上林、青木、八木、東田氏等、20 代の方々が多く参加されました。」と記されています。

結果は若手を擁する B Y C さんに軍配があがったのですが、これが原因で K Y C は若手を入れなければということになったのではないかと存じます。しかし、当時の正会員入会金が 80 万円と若手にはハードルが高いので準会員制度がつくられたようです。1970 年代にこの準会員制度によって山田、布目の両氏や私、そして他にも数人の方が入会されましたが、現在も K Y C のメンバーとして残っているのは山田氏と私だけとなりました。

比叡レガッタも今年 44 回目となり長いお付き合いとなりました。一番大切なことはレースであってもクルージングであつてもパーティに於いても交流をもつことではないでしょうか。今後も交流の場を多くもち、親睦を深めていただきますようお願い申し上げます。

私のヨット経歴

湖翔ヨット倶楽部 会長

木下 清



ファイアーボール級の自作

琵琶湖ヨット倶楽部が設立90周年を迎えられたこと心からお祝い申し上げます。本邦最古のヨット倶楽部ならではの新たな1ページを開かれることに改めて敬意を表します。

私は1969(昭和44年)それまで熱中していた山登りにそろそろ体力の限界を感じ始めていた頃、西宮の海岸で見た白帆の群れに引き込まれるようにヨットに転向することを決心しました。

そして西宮のヨットクラブに入部し、毎週土曜日に仕事が終わるとヨットハーバーに直行し艇庫のベットで夜を明かし早朝からヨットに乗るといった生活を始めました。

そのクラブではヨットの乗り方を一から習い、更にはヨットの修理やスナイプ級の建造も経験することが出来た。そしていろいろな古参メンバー達から海の上でのマナーのこと、安全のこと、さらにはシキタリなど多くのことを教えられ私のヨットライフの基礎をつくることになりました。

いつしかレース志向になった私はクラブ艇でレースをすることに飽き足らなくなり、そのころ盛んになり始めていた470級の中古艇を手に入れて乗ったりしていましたがそれにも飽き足らず、ファイアーボール級(FB)を自作したのでした。

そして琵琶湖ではレースが盛んでその環境が良いという情報を耳にし、FBの計測で浅山さんにお世話になった縁もあり1977(昭和52年)琵琶湖セーラー仲間入りしました。

当時琵琶湖には東レがFRPで作ったFBもあり10艇ほどの仲間がセーリングしており、また自作艇を持って参加してきたチームもありフリートとしても活発な活動をしていました。そして当時FBがアジア大会の制式艇であったのでその予選に江ノ島までカートップ

で遠征し、湘南の海で大きな波の中ダイナミックなセーリングも経験しました。そしてやがてFBの全日本を琵琶湖で開催するようにまでなりました。

当時は今とは違い日本社会は右肩上がりの成長を続けておりヨット界もディンギー、クルーザーとも続々と新艇が建造され、レースにはスポンサーがつき豪華な賞品が出たりして多くのセーラーが楽しみました。今では想像もしにくい状況ですが・・・。

身近な琵琶湖ではハーバー管理運営委員会のポイントレースや琵琶湖ヨット倶楽部(BYC)のびわこカインドレガッタ、京都ヨットクラブ(KYC)のダブチックレガッタ、名鉄マリーナカップ、長浜ひょうたんレース、琵琶湖ヨットフェスティバルなど多くのレースがあり随分と楽しむことが出来ました。中でもBYC主催のびわこカインドレガッタで参加艇が100艇を越える大フリーとなりスタートがラインスタートに代わって他ではあまり取入れられていなかったゲートスタートが採用されました。ゲートを開けるパスファインダーとしては一目でそれと分かるクラシカルな帆装のツェナー級(EZ)が走り、優雅な姿に見入りつつあれこれ作戦をたてたものでした。このレースは後に大津市市制100周年を機にセール大津と名を変え現在もBYCの主管で連綿と続けられている琵琶湖を代表するディンギーレースとなっています。

また、ハーバー管理運営委員会が主導しハーバーにいる各団体が交代で運営を担当するポイントレースは競技ヨットを目指すものにとっては大変良い練習環境を提供してくれていました。ジュニアの育成とこのような環境が後にワールドやオリンピックで活躍する選手を育てたことになったものと思います。

琵琶湖に来て以来 私はクラブには所属していませんでしたので艇は屋外保管でした。その後県立艇庫が老朽



化に伴い建替えられ1996年に新しくなったのを機に京都セーリングクラブ（現湖翔ヨット倶楽部）に加入しやっと屋根の下に艇を保管できるようになりました。艇庫のお陰でクラブメンバーとビールを飲んだり、雨の湖面を眺めたりしてくつろぐことも出来るようになり、ヨットライフが少しゆったりしたものになりました。

F Bはスコータイプなので波でバウが叩かれ特に軽風時はポチャポチャという音が気になったものですが、音も無くすべると走るシーホース（SH）の優雅な帆走に惹かれていました、そんな時に熱烈なSHファンの武田さんの艇のレストアに付き合ったのが縁でミイラ取りに成ってしまった感がありますがシーホースに乗り換えることになりました（SHのほうが誰とでも乗れると言うメリットもありました）。

この後、湘南水域からシーホースを多数譲り受け皆できれいに整備したため我々のクラブはSHの保管艇数が一挙に増えました。これはクラブの創始者井上正春さんの志向されたところでもあるようですが・・・琵琶湖フリーでも随分充実したものとなりました。そしてシーホースの盛んなKYCの皆さんと練習をし、また毎年秋には一緒に葉山や江ノ島の海に遠征しセーリングを楽しむようになりました。

最近は毎週のようにハーバーに顔を出していますがセーリングで湖上にいるより艇庫の前にテーブルを出してグラスを傾けていることが多くなっています。そのため宴会をしていることのほうが多いのではと周囲から見られるような有様です。加えて、木造のシーホースはメンテに手をとられることが多く、またあれやこれや手を加えることの楽しさもあり、最近では大工さんの時間が多くなっています。今ではこれもヨットの楽しみ方のひとつであると強弁している次第ですが・・・。

またこのところ自由時間の多くなった人たちが余暇

の楽しみとしてヨットに着目する方が現れるようになり、仲間として迎えることが増えてきました。風と水に接する舞台を提供してくれる琵琶湖はヨットとベストマッチではないでしょうか、そのような舞台に安心して帆走することが出来れば我々もヨット仲間をもっと増やせるのではないかと考えています。そのための方法をなんとか構築したいと思っています。

私が琵琶湖に来てから35年になります。社会事情と共にヨットの環境も随分変わったはずですが周りで見かける顔ぶれはあまり変化がない様に感じられます。ヨット界の置かれている状態を暗示しているようにも思います。しかし風と湖、夕暮れの湖面など見ているとゆったりした時間が流れているようで癒しの空間を感じます。私自身もまだしばらくはこのすばらしい環境を満喫したいと思っています。



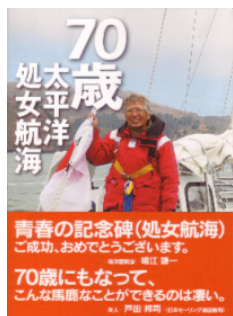
2011年 SAIL おおつにて

90周年おめでとうございます
京都ヨットクラブ

村田 和雄



web 70歳の太平洋航海記より
村田和雄氏と咲良丸 San Francisco Yacht Club に無事到着 (2006年8月23日ー米国時間)



1994年 比叡レガッタ

BYCのある県ハーバーに私が顔を出したのはもう40年以上前のことでした。その時までBYCの存在も知らず。関東から移った私たちは子供を肩車して女房と久しぶりに水を眺めに立ち寄ったときでした。関東のヨット部を卒業後関西に就職。昼休み、空を仰ぎ、頬をなでる風にいてもたってもいられず、休日には関東まで足をのばしヨットに乗っていた生活を、二兎は追えないと決意し仕事に集中してから10年を経過していたときでした。なつかしさ一杯でハーバーのスロープにたたずんでいるときふと通りがかりの粋なブーツを履いた一人のセーラーがおりました。自分でも自覚しないまま“今からヨットをやるとしたら艇種は何が良いでしょうか”と質問してしまったのです。実はその方がBYCの野田さんで“今ヤマハがキャンペーン中のヤマハ15が良いだろう”とのアドバイスをいただき、結局また第二のヨット生活が始まったのでした。女房は国体選手でもあったので、その後は女房がトラピーズクルーとなり西日本では負けなしの時代を過ごし、この間日米親善レースにも参加しました。

ハーバーに日参しだすと次第にBYCが恐れ多い存在であることがわかってきました。BYCを尊敬せずしてこのハーバーのセーラーにあらず、という雰囲気でした。当時フインにのる輩もいて、これから世界を制覇せん、とばかりの勢いでした。しかし一方ではデッキチェアを持ち出してのどかに過ごしている方もあり(今の長谷川会長)また、ヨットの学識高い鈴木(?)さんもおられ、またオリンピック候補選手も輩出しているなど、な

かなかバラエチーに富んだクラブであることがわかりました。不開催となった幻のベルリンオリンピックのEZ艇を要し国際的なレースをされたのも記憶にあたらしいことです。私はその後1970年代KYCに入ったのですが、恒例のダブチックレガッタのときに素晴らしいKYCの環境に魅せられ、その後若手レーサーを期待していた北岡さんの強い勧誘もありクラブ員となりました。

歴史とは面白いもので何十年も立っただけでもクラブのカラーはその創立時のカラーを反映しているように思います。BYCはボートクラブが母体であり、オリンピック候補者をだすほどの本格派の伝統をもっております。今でも多くのレーサーの選手を輩出し活発な活動をしています。以前は5月にカインドレガッタを開催し琵琶湖の一大イベントでしたが今は大津セールに引き継がれています。BYCの毎月開催されるポイントレースは長く堅実に開催されている日本でも数少ない事業ですが、これはクラブ員の強い意志がないとできない事業です。私も(77歳)時々楽しませていただいております。

一方KYCは終戦直後に同好会の集まりからスタートしています。どちらかといえばスキーや山を愛する進取の気性に富んだ当時のハイカラな人達がヨットも遊びの一つとして始めたようです。それはいまでもKYCクラブの特質のような気がします。ところでKYCが現在の位置に移る前はBYCの隣にあったこともあり、BYCとは長く親しい付き合いをしており、比叡レガッタはその代表的な存在です。BYCの方がKYCに入られる方も何人かおられました。両クラブ員が揃ってヨーロッパの世界選手



Laser Masters World 2009, Halifax, Canada

権に参加したこともあります。私の大好きな KYC のシーンは BYC の吉本さんがヨーロッパクラスの小船にのり BYC から KYC の白浜に着け、ふねからおもむろにカクテルセットを KYC のベランダに持ち込み、お得意のカクテルをつくって KYC の面々にご馳走いただき話題豊富なジャズやヨットの話に華が咲いたのは実にのどかな KYC にふさわしい光景でした。KYC の砂浜に一人ふねで乗りつける格好の良さは是非再現していただきたいものです。

日本のヨット界、いや世界のヨット界が低調です。この美しい琵琶湖で大いに老若男女を啓蒙し皆でヨットを楽しみたいものですね。

90周年おめでとうございます。

KYC 村田和雄



Laser Masters World 2009



BYC CUP にて

BYCの思いで
京都ヨットクラブ
村田 耕一



昨年2011年のセイル大津（息子と）

1970年代に私は家族（両親 村田和雄（父：京都ヨットクラブ所蔵）、陽子（母）、拓（弟：ジュニア出身、尚子（妹））と毎週末 柳ヶ崎ヨットハーバに遊びに来ていました。両親はヨットレースの参加、弟はジュニアヨットクラブの練習の参加で湖面に出ていました。私と妹はハーバー内で釣りなどをして遊んでいました。これがヨットを始めるきっかけでした。当時ハーバーをウロウロしていると必ずBYCのクラブハウスは開いており、たくさんのメンバーがクラブハウス前でくつろがれているのを記憶しています。

記憶に残っている光景としては木製の美しいヨーロッパ級が艀装されてクラブハウス前におかれ、ヨットの艇種詳しくなってから知ったのですが、フィン級もおかれています。ソリングの“PLAYBOY”も美しい光景でした。クラブ前ではいつも昼食やお酒を楽しんでいる光景を羨ましく、あこがれていたのを記憶しています。BYCの皆さんは今でも同じですが、当時は風が強くなるとさっそうとセーリングされ、この光景もかっこいい姿でした。

もうひとつ忘れられないのが 琵琶湖カインドレガッタ（現セイル大津）です。毎年5月5日ぐらいに開催されていて憂鬱な時期でした。憂鬱な原因は、当時、両親はヤマハ15でセーリングしており必ず参加していました。父に時間がある時は両親がそろって参加し、いつもの様にハーバーで遊んでいれば良かったのですが、私が小学校の高学年になる頃 父も忙しくなり、私が母のクルーを行う事になったからです。5月の琵琶湖はいつも風が強く、学生さんも沈をするぐらいでした。その状況下で小学校高学年がヤマハ15のクルーとしては体重も軽く苦しみました。あるカインドレガッタで風の強い日、母が小学校6年生の私と小学校3年生の弟（小学校6年生時代に宮島の全日本のOPでの優勝者）と参加する事になりました。レース前からレース委員長の秋山氏から“今日はやめとけ”と言われながらも強気の母は参

加の意思を変えるつもりも初めから無く参加しました。案の定、スタート時のタックでアンヒール沈し、幸い本部船の近くしたのでレース委員長の秋山氏からマイクで“村田はん やめときなはれ”と助言をしてくれたのですが 母は、何を言っているのよっという感じでしたので秋山氏も“下のちびさん（弟）だけでも 本部船で預かるわ”となり、心中では“私も預かって”と思っていましたが、そのお声かけはなくレースに再び参加。結果は当時遠かった上マークの手前で沈をし、マストが湖底にささり、OPすべてに抜かれるまで沈状態。その間母は琵琶湖の冷たい水の中で心配でしたが、私は幸いセンターボードに乗れたので冷たい琵琶湖の水を避ける事ができました。最終的に運営艇に救助されて無事ハーバーに戻ってきました。ハーバーについてホットした私でしたが、母はフィニッシュできなかつた事を残念がり、母のヨットの情熱を改めて当時感じました。当時の運営の皆さんには心配をかけたと思います。現在は暖かい時期の夏の開催となり私の家族とも参加させてもらっています。

いつもお世話になっているBYCとの対抗レースも思い出のひとつです。比叡レガッタの発足の理由はヨーロッパを購入した若いBYCとKYCのメンバーの1年間の練習成果も含めた腕試しと聞いた事があります。現在はKSYCさんも参加されクラブ対抗レースとしても充実してきています。ビギナーも混じってのクラブ対抗レースとしてヨット生活が充実すればと思っています。

いつもBYCさんのヨット活動への貢献に感謝しています。いつもでも かっこいいヨットクラブとしてあり続ける事を期待しています。

90周年おめでとうございます。これからもよろしくお祈りします。



BYC CUP にて



2010年 SAIL おおつ



BYC CUP



2011年 比叡レガッタ

『サニーレタス号』の製作
湖翔ヨット倶楽部
北野 文男



私は、琵琶湖大好き人間で家は京都の宇治ですが、中学生当時（昭和33年ごろ）毎年、8月の1ヶ月間は大阪の下百石町のいとこの家で夏休みを過ごしていました。その当時の琵琶湖には、玻璃丸・京阪丸・弁天丸などが近江舞子・真野・マイアミの水泳場へ大津港から出ていて柳が崎水泳場にも寄っていました。

ある機会にネットでイトコンヨットの記事を見て早速作ることにしました、文字どおり釣竿と釣糸でコントロールする模型です。全長57cmのサニーレタス号を作りました、その船で遊んでいるうちにこれを5倍ほどす

れば人が乗れるのではないかと思います我家の6畳の居間で造ってしまいました。今は大好きな琵琶湖で人が乗れる大きな模型で楽しんでいます。



「ヨットを始めて」

湖翔ヨット倶楽部

七寶 均



琵琶湖ヨット倶楽部設立九十周年にあたり誠におめでとうございます。心よりお喜びもうしあげます。また、倶楽部の皆様もさぞお喜びのことと存じます。今後、貴倶楽部の益々のご発展をお祈り申し上げます。

さて私は、平成二十三年の春から湖翔ヨット倶楽部にお世話になることになりましたヨット歴一年足らずの超ビギナーです。

ヨットを始めたきっかけは、まだ現役で勤めていた頃にOBの人たちの集まりに参加したときに、久原先輩から「会社を卒業したら何かする事あるのか」と聞かれ特に何も考えていないと答えると「ヨットせえへんか」と誘われたのがヨットを始めたきっかけです。ヨットは全く興味が無かった訳ではなく、少しは興味もありました、琵琶湖を自由にヨットを操って走れたら、さぞ気持ちがいいだろうと夢見てヨットを始めることになりました。

琵琶湖の最初のデビューは2010比叡レガッタでのレスキュー船からの応援・観戦でしたが、ルールも何も分からないまま一日が過ぎ去りました。しかしヨットに乗るチャンスは一年後に訪れました。第18回琵琶湖サマーカップでいきなりクルー…クルーなんてやったことない何するんやろと思ひながら、スキッパーの牧野さんと出艇しレース開始までの間にタックの練習を何回も練習し、いよいよレース開始です。

何回も練習したタックでしたが、レースが始まって最初のタックで見事にタック失敗、心の中で牧野さんゴメンと言いながら琵琶湖に沈み、初めてのヨットで最初の半沈を経験しました。今では倶楽部の木下会長をはじめ諸先輩方のご指導もあり久原先輩と二人で自由にはいきませんが、何とか出艇しハーバーに帰ることが出来るようになりました。

以前より二人で乗って出て帰ってこれたら良いですねと話していたことが、こんなに早く実現するとは思っていませんでした。

これも、湖翔ヨット倶楽部の皆さんのお蔭だと感謝しております。

これからも、皆さんとヨットライフを楽しんでいきたいと思っております。

ご指導よろしくお祈り申し上げます。

御祝いのことば

— 琵琶湖ヨット倶楽部 90周年に—

松井 明子 (旧姓：中塚)



昭和 23(1968)年 BYCにて



1972年 BYC50周年記念パーティにて

華やかな 21 世紀初頭に生まれた日本の、京都の、滋賀の若者たちのさざ波のビワ湖を前にした遊び心から生まれた、琵琶湖ヨット倶楽部が、21 世紀の今日、90 年の年月をもって、多勢の会員皆様方、又関係の方々の御努力によって尚今も生き生きと楽しい日々をもって存在しておられることを、心よりうれしく存じます。そして誇りに思います。

我が父、中塚善助らが話していたのを思い出すのですが、当時、瀬田でボートを漕いでいた京都一商のボート部の若者たちが、湖を風で走る三十石船の帆を見て、あれは漕がなくていいのでしんどくない、あれにしよう！と云ってヨットに乗ることにしたとか。早速、船善さんたち船大工の方々の協力を得て、A 級ディンギー、5 米のヨットが出来たそうです。

やがて、柳が崎に艇庫が出来て先の戦争が始まるまでは、今でいうリゾートとして、私たち子供も母や姉たちと日曜日には、ヨットのお家へ京阪電車に乗って行ったものです。

戦争の後、昭和 20 年以降は、中支から帰った父に連れられて、新制中学生になった兄と弟と 3 人日曜日ごとに湖のそばの道を、進駐軍のトラックやジープに追い越されながら、炎天下柳が崎の艇庫へ通いました。

当時は、宮崎晋一さんのおられた島津製作所のヨット部、京都ヨットクラブと共に、同志社大、京都大、立命館大らの学生さんらを中心に、毎週レースです。艇庫の前が本部で、手作りの赤球が五ヶ挙げられ 5 分前、一つずつ降りてスタート、学生を育て、育てられ、ヨットの

人口を広げられました。昭和 25 年原爆の都市広島での国体には新制高校男子の種目が出来、兄が今の YYC の澤田明さんと出場し優勝、次の年、昭和 26 年、女子の種目が出来て、堀川高校に入学した私も、滋賀からの上田美智子さん御姉妹と一緒に、わからないままに、松島海風の上でレースをさせて頂きました。男女平等の戦後で初めてヨットに乗る女性が全国に出来た年です。それから 4 年、西宮での国体まで毎年皆様に支えられて参加させて頂きました。実業団、大学、高校と、国体のレースと共に対抗レースによって育てられた若者たちが社会人に、父母になり、我が子供たちにもヨットを教え楽しませてやりたいと、森岡先生を校長さんにジュニアヨットクラブが出来ました。ジュニアには親が付いて行くことになっておりました。私の娘、松井春も参加させて頂き、毎週日曜日柳が崎ヨットハーバーに送って行くと、沖で指導してられるお父さんと子供たちを待つ陸でぼんやり帰浜を待つお母さんを見て、大丸ヨット部出身の山田佐代子たちお母さんを誘って、お母さんの会を作ろうと提案しました。日本ヨット協会の小沢吉太郎先生が少年少女ヨットに御尽力だったので、秋山福夫先生を通じてご相談すると、早速「白鳥の会」(あひるを育てる会)という会名を頂いて十人余りの会が出来上がり、40 歳前後のお母さん、熟女時代は毎週日曜日が楽しみになり、ジュニアの合宿やレースの食事を用意する他に、トッパーに乗ったり、粉川龍之介さんのポーリバー号で、5 月末のクルーザーフェスティバルに毎年出場して、楽しい時を頂きました。子供が卒業すると、毎年お正月過ぎ

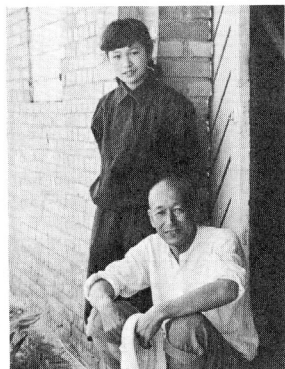
琵琶湖とヨットと父〔中塚善助〕

松井明子

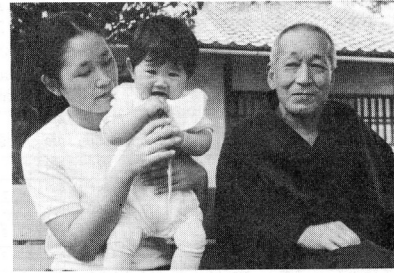
「お水取りやさかい——」京都では春寒のいいわけに
 こういう。盛会だった三月六日の京都での日本ヨット協
 会創立五十周年記念祝賀会の日も、快晴ながら風は冷たく、
 早朝には目にしみる白い雪が積っていた。「父の思
 いを書き、それが娘の仕事だよ」久しぶりにお目に掛
 った小沢吉太郎先生が言われる。祝賀会では多勢の方々
 から「今日お父さんがいられたらなあ」と暖かいお声を掛
 けて頂いた。けれど私は、天国のヨットマン達と祝う父
 の笑顔を、いつも背に感じていた。孤独で凛凛しく水に
 浮ぶヨットのあるところ、そしてヨットマンのいるとこ
 ろに、父の姿を見る。それは炎天の道を黙々と、修業僧
 の如くハーバーへ向かう父の姿でもある。

戦前—私の幼ない頃は、琵琶湖ヨット倶楽部のクラブ
 ハウスへ家族揃って出掛け、クラブの子供達と現在も湖
 を走るEZ級ツエナーなどに乗せられて、楽しい一日を
 過ごした。その様子を16ミリのカメラで写してくれた父は
 いつも楽しげでよく冗談を言って子供達におどけてみせ
 たものだった。

中支出征から終戦と同時に京都室町の白生地卸商に戻
 った父は、二十代で父親を失った一人息子のぼんぼん、
 几帳面で真正直、おだやかな口調ながら言い出したらで
 こでもまげぬ、そして自らにも厳しい、頑固なまでの意
 志の強さは終生変らなかつた。帆走委員の父の判定に、
 口惜しい思いをされた方が、多勢いられる様だ。そんな
 一徹な父には、戦後社会の混乱の波は乗りにくく、厳し
 い顔の白足袋、角帯姿が京の底冷えの中にあつた。



柳ヶ崎にて父と



毎年三月十二日、奈良のお水取り満願の日が父の誕生
 日、その頃を境に水のぬるみ出した琵琶湖への「御出勤」
 が始まる。京津電車が山科をぬけて逢坂山トンネルを出
 ると、朝日に輝くさなみの広がる琵琶湖が眼下に見え
 る。進駐車のジープの行き交う湖岸道路の先の柳ヶ崎ハ
 ーバーには、青春を共に過した友人達と純粋で真摯な学
 生達、千変万化の自然との遊び、ヨットが待っている。
 毎日曜日、いつも決って玉子焼と山椒の入ったお弁当を
 持って琵琶湖へ行くのを、私たち家族は父の「御出勤」
 と言っていた。国体に女子の種目ができて、当時高校生
 だった私は、にわか仕立ての選手となって「御出勤」のお
 供をする様になった。好きな大工仕事の生かせる艇の
 修理、艇車の整備、そして五分前に赤玉を上げるレース
 の運営など、ハーバーでの父は多勢のお仲間と囲まれて
 沖から戻って来ると小さな眼鏡を手に、温和な笑顔で迎
 えてくれた。「ヨットレースは、一度として同じレース
 がない。それがヨットの面白いところやー」そんなこと
 を言っは、おいしそに盃を重ねる父であった。

盃といえば、晩年、日本ヨット協会から頂いた功労賞
 の金盃で、母やお年始めに集った兄弟達と祝ったあと、ピ
 ワロジュニアヨットクラブに入っていた孫である私の娘

に、「おじいちゃんからのお年玉—
 」と言って大切にしていた黄ばんだ
 「ヨット百科」を贈る好々爺でもあった。
 満七十八才、文字通り安らかに逝
 って四年を経た今、ヨットという遊び
 を仕事とした父からは、うまい世渡り
 や裕福な生活を教えられることはな
 かったけれど、豊かな湖と素晴らしいお
 仲間にも恵まれて遊びに徹した、幸せな
 人の重さをかみしめている私である。

Yacht 記事 1983年5月 琵琶湖とヨットと父

仲間で各地温泉に旅して楽しい思い出を作りました。今
 もお食事会の折にはその話題で笑いが絶えません。お母
 さんヨットの他に、レースに専念してオリンピックに出
 場された方もあり、多くの女子選手が生まれたことはう
 れしく関心するばかりです。

こうした私の学校時代から現在に至る楽しい生活を
 思い出してみると、そこにはいつおBYCの皆様のおかげの
 温かいお力添えのあることを忘れてはなりません。先頃古い手
 文庫を整理していると、現会長の長谷川和之さんの父上、
 長谷川英一さんが、父に宛てられた手紙が出て来て、そ
 こにはクラブの発展、会員に一人一人に話しかける言葉
 が綴られておりました。それと同じ様に、今の長谷川和
 之会長も、会員の方々にも、周囲の方々を同じ様に大切
 になさること、ヨットを大切に、楽しむ生活を自分か
 ら実際に行い、示しておられること、会の皆さんもそう

しておられるのを見て、それでこそこの90年があるの
 だと思います。どうぞ、その気持ちを受け継いで、百年、
 二百年と、琵琶湖ヨット倶楽部のあることを、心から念
 じる私です。誠にありがとう存じました。

